

2020年度

地球環境『自然学』講座

第5回

テーマ

いのちの網の目の人類学

講師

北海道大学大学院 文学研究院

教授

小田 博志 先生

2020年12月12日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

小田 博志 (おだ ひろし)



1. 経歴

香川県牟礼町原という農漁村で生まれ育つ。遊び場は海辺や畑でした。大阪大学人間科学部で文化人類学を学ぶ。関西では奈良・熊野・大峰を好んで訪れました。同大学院博士課程単位取得退学の後、1994年からハイデルベルク大学医学部心身医学科医療心理学研究室に留学。ドイツではバッハなどバロック音楽に傾倒しました。2001年にがんの自然寛解に関する研究で博士号 (Dr. sc. hum.) を取得、北海道大学大学院文学研究科に着任。その頃、健康・医療に関する研究から、平和研究へとシフトしました。さらに2011年の東日本大震災を東京で経験したことを契機に、自然そして生命への関心を深めています。

2. 現職

北海道大学大学院文学研究院・文化人類学研究室・教授

3. 著書

Spontanremissionen bei Krebserkrankungen aus der Sicht des Erlebenden (『体験者の視点からみたがんの自然寛解』) (Beltz, 2001)、『エスノグラフィー入門―〈現場〉を質的研究する』(春秋社、2010年)、『質的研究の方法―いのちの〈現場〉を読みとく』(波平恵美子と共著、春秋社、2010年)、『平和の人類学』(関雄二と共編著、法律文化社、2014年) など。

シニア自然大学校 地球環境『自然学』講座

いのちの網の目の人類学

2020年12月12日

小田博志

北海道大学大学院文学研究院

<http://skyandocean.sakura.ne.jp/>

はじめに

新型コロナウイルスは自然からの声

- 新型コロナウイルス感染症の解決策は何でしょう？
- 人間が引き起こす森林破壊が、野生動物の生息域を狭め、また気候変動によりそれが拡大し、野生動物(特にコウモリ)と共生していたウイルスが人間に移り、グローバルな移動によって拡散した結果、このパンデミックが起こっている。
 - [A message from nature: Coronavirus](#), The United Nations Environment Programme (UNEP).
 - [Why deforestation and extinctions make pandemics more likely](#), by Jeff Tollefson, nature, 07 August 2020.
- すると、それは経済成長を追い求めてきた人類に対する、自然からの声ではないでしょうか？

人類と自然の分離から始まった

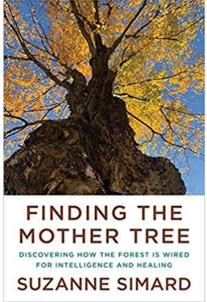
- 近代になって、人類は自然から自らを切り離すようになった。
- そして、人類が「自然」をモノのように客体化し、所有し、支配し、利用する主体に成り上がった。
- その方向に進むことが「進歩」であり、「経済成長」であるとの考え方を前提に、近代社会が作られてきた。
- その結果、物質的な「豊かさ」は手に入ったかもしれないが、自然は汚され、壊され、新型コロナのようなパンデミックが起こり、グローバル気候変動によって将来世代の生存すら危うくなっている。

今日考えたい問い

- では、どうすれば自然と人類の分離をつなぎ直し、世界のあり方を変えていくことができるのでしょうか？

科学の現場から

- 「木々はいかに話し合うのか？」スザンヌ・シマード(ブリテイッシュコロンビア大学教授、森林生態学)
- 森の木々は、日光や養分を奪い合う生存競争を繰り返しているのではなく、菌根(mycorrhiza)や菌糸(mycelia)を介して地中でつながり合い、養分を与え合い、情報を与え合って話し合っている。
- 森はひとつの生きもののように生きている。



FINDING THE MOTHER TREE
DISCOVERING HOW THE FOREST IS WIRED FOR INTELLIGENCE AND HEALING
SUZANNE SIMARD

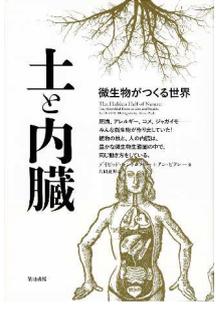
あなたは生態系

- 私たちのからだは、受精卵に由来する体細胞だけではなく、その数倍から10倍とも推定される膨大な微生物(microbe)と共生する、生態系である。
- 特に腸に共生する微生物群は腸内フローラとも言われ、人間の身心の状態をも左右している。
- 生物は体細胞の遺伝子によって決定されるのではなく、他の生物との共生関係の中であり方を変えている。



100% HUMAN
あなたの体は9割が細菌
微生物の生態系が刷れはじめた
アロン・クルグ
矢野龍太郎

微生物が媒介する 生きとし生けるもののネットワーク世界



- 人体内の微生物は、他の生物、引いては土から取り込まれたもの。
- 植物もまた微生物との共生関係にあることを考えれば、人間を含めた生きとし生けるものは、微生物を媒介にした壮大なネットワーク世界の中で生きていると言える。

森里海連環学：森～海における生態系間のつながり、生態系と人のつながりを考える



生態系と人間社会のつながり
産業と暮らし
生態系サービス
資源利用・管理

生態系相互のつながり
物質・エネルギーの流れと循環
生物多様性と生物生産
生物間、生物・環境間の相互作用

「森里海連環学」に、微生物の視点を加えると、何が
見えてくるのでしょうか？ (上図: <http://www.cohho.kyoto-u.ac.jp/about/cohho/>より)

先住民族の視点 indigenous perspective

人類学の新しい潮流

- 「自然／文化」の分割を超える
- 人類中心主義(anthropocentrism)を超える
- 人類だけの人類学ではなく、人類を他の「生類」との関わりの中でみる(マルチスピーシーズ人類学)
- いのちある自然が、生命が問題になっている。
- 先住民族の世界を、たんに「遠く離れた、物珍しい彼らの文化」のように捉えるのではなく、そこから新しい世界のあり方を学ぶ

鮭が森をつくる Salmon make a forest.



アラスカ先住民の言葉。川で孵化した鮭は、外洋を回遊して栄養を蓄え、生まれ故郷の川に戻って、産卵をし、その死骸が川辺の森に栄養を与える。(星野1998:132)

We are one 私たちはひとつ

カナダのコーストセイリッシュ族の言葉

we're connected to each other, and to nature, that we are one. But nature is not some separate thing, but an intimate part of us. And what we do on this Earth ripples through our ecosystems, our web of connections.

the people are connected through spirit to forests, and oceans and rivers and bears and salmon.

the Coast Salish people were deeply scientific. How else could they have lived here for over 10,000 years in such prosperity? (Suzanne Simard, [Nature's Internet](#))

ミタクエオヤシン

私につながる全てのもの

北米ラコタ族の言葉

「自分は一人では生きていない。全てのものの繋がる生命連鎖の輪の中の、一つの存在でしかない。全てのものは、人間ばかりではない。動物も、植物も、山や川も、宇宙の全てである。それらのもののおかげで、自分が生かされ、また自分は、それらのもののために生きることの誓いの言葉が、「ミタクエオヤシン」なのである。」(阿部2014:97)



アンデスのサルワ村の段々畑 (2020年3月)



アイユ (ayllu)

「共同体を意味するアイユとは、特定の人間集団が住む地域ということだけでなく、それ以上のものです。それは世界に存在する一人間、植物、動物、山、川、雨などまで含むあらゆる生きものの共同体を指していて、それら全てが家族のように関わりながら、生き活きと生きている場のことです。重要なのは、この場所[共同体]は、私たちの出身地ではなく、私たち自身であるということです。例えば、私はウアントウーラ出身なのではなく、私はウアントウーラなのです」(Oxa 2004: 239; デ・ラ・カデナ2017:65より)

アイワイ (uyway)

人間と人間以外のものケアし合う関係

「尊重とケアがアンデスの暮らしの基礎です。それは単なる概念でも説明でもありません。ケアすること、尊重することが意味するのは、育みたい、そして他者を育みたいということです。これは人間だけでなく世界に存在するすべてに関わります。育むことすなわちアイワイはアンデスの暮らし全てを彩っています。パチャママ(大地の神)が私たちを育み、アブ(山)が私たちを育み、彼らが私たちをケアします。私たちが子どもを世話し、彼らは私たちを世話します。私たちがタネを、動物を、植物を育て、彼らも私たちを育てます。」(Oxa 2004: 249; デ・ラ・カデナ2017:66、小田が改訳)



アマゾン



チーフ・ラオーニ
Raoni Metuktire

写真: [L'appel du cacique Raoni et des ONG à l'occasion du G7 - Planète Amazonie](#)
([planeteamazone.org](#))

「人間はちっとも偉くない。森や川、空や大地の声に耳を傾けよ。その全部に精霊が宿り、沢山のことを教えてくれて、それに従う。人間の都合だけで判断する事は間違っている。お前たちの社会は目先の事しか考えず、目に見えるものしか信じない。森が無くなれば、インディオも死ぬ。でもお前たちも滅びることを忘れてはならない。」(南2006:63)



オーストラリア・キンバリー・フィッツロイ川

大地は、世界は、生きている

「もっとも重要なのは、この大地もまた生きているという点である。これはジミー・マンガヤリが私にくり返し強調した点だった。ジミーじいさんは、手で土をすくうとそれを私に見せ、「君はこれを土だと思うだろうが、これは人なんだ」と念を押すように語った。」(保苺2004:61)

「世界は生命で満ち溢れているだけではない。すべての生命ある存在は、生きた大地からやってくる。この意味で、「世界それ自体が生きている」と言うこともできるだろう。」(保苺2004:62)

新しい科学と 先住民族の智恵とが会うところ

- 生きとし生けるものは互いにつながり合っていて、その〈いのちの網の目〉の中で個々の生きものは生きている。
- 〈いのちの網の目〉こそ生きている本体であり、人間のいのちもそれを離れてあり得ない。
- 〈いのちの網の目〉の中で、私たちは生きている。

生きているということに立ち還る

生きているということ

- 私たちは、生きています。
- 〈いのちの網の目〉というイメージを、私たち自身のこととして理解するために、私たちがいま「生きている」という、もっとも当たり前のことに立ち還ってみましょう。
- そこにはどんな特徴があるでしょうか？

生きものの特徴

- 機械のように他人によって作られ、操作されるのではなく、生きものはおのずから動き、成長し、変化します。これを**自発性(spontaneity)**と名づけましょう。
- また、工業製品のように規格通りに、画一的に製造されるのではなく、生きものはおのずと異なっています。これは**多様性(diversity)**です。
- そして、生きものは互いに関わり合い、その関わり合いの中で生きています。これは**関係性(relationality)**です。

いのちの自発性

野口晴哉(はるちか)と整体



写真: [野口晴哉公式サイト](#)

「生くる目的は生くること也。生くることの何なるか、人知らず、ただ自然これを知る也。」(野口1977a25)

「人間の運動を調べる場合に、
・そのことを自発的にやっているかどうかの方が重要なのです。やることが自発的なら、会社では居眠りばかりしている人でも、麻雀で徹夜ができるのです。自発的にやっていたら力が出るので。」(野口1977b:242)

渡辺位(たかし)と不登校の子どもたち

「[小学生の息子の]拒食が始まって三か月たった頃、目からウロコが落ちる経験をします。

登校拒否を「自己を防衛するための危機回避の動き」として、異常視せず、ありのままのその子を受けとめる大切さを指摘しておられた児童精神科医の渡辺位さんと、はじめてお会いした日のことでした。二時間ほど息子と、ただ人間どうししゃべりあった、それだけにみえたのですが、子どもが「羽が生えたようにいい気分になった。こんな気分は何年ぶりだろう」といい、はじめて「腹減った、おにぎりが食べたい」といったのです。子どもは、「僕は僕でよかったんだね。渡辺先生に会ったら、そう思ったよ」といいました。本当に、心と体は一つだったのです。」(奥地2005:5)

木村秋則と自然栽培



「主人公はよ、リンゴの木なの。」

「私はただ、リンゴの木が育ちやすいような環境をお手伝いしているだけです。」

(「プロフェッショナル仕事の流儀」NHK総合2006年12月7日放送)

いのちの自発性を前提とした関わり

- これら3つの例は、相手(病む人、不登校の子ども、リンゴの木)のいのちの自発性を感じとり、尊重して、関わる姿勢を表しているように思います。
- そのように関わったとき、相手は思わぬいのちの力を発揮するようです。

木村 敏



生命的自発性

「生命的自発性の水圧が一杯にかかった水源から、個別的に分離した(「身」と呼ばれる)身体的存在の出口を通して迸り出る噴水のようなものを思い浮かべてみよう。一つひとつの噴出口の特徴にしたがってそれおれに異なった弧を描く水の曲線が、個々の自己だということになるだろう。

自己成立以前のメタノエシス的な水源には自己もなければ他者もない。なにもかもが渾然一体となった「おのずから」の動きが見られるだけである。」(木村 1988: 205-6)

大きないのち

「例えば、僕なら僕がここにこうやって生きている、このからだが生きているわけですがけれども。しかし何か大きないのちみたいなものが、あるように思うんですよね。非常に大きな、自分が生きているなんていうことを包み込んでしまうような、**大きないのち**みたいなものがあると思いますよね。それが自分のからだの中に流れ込んできて、それで私のいのちになってるんだらうと思う。そのいのちをみんなで分かち合っている。それがさつき向谷地さんがおっしゃった生活者の仲間になるということだと思っただけでも。」 (木村敏×べてる(濃縮版)YouTube(2'55-3'58))

いのちの網の目を捉える

- いのちの自発性が働いて、形になり、多様な生きものが現われる。その多様な生きものたちが関わり合っていく(いのちの網の目)を綾なしながら生きている。私たちが生きている世界は、このようなものであるようです。
- では、このあり様をどのように捉えることができるでしょうか？

レイチェル・カーソン 『沈黙の春 (Silent Spring)』より



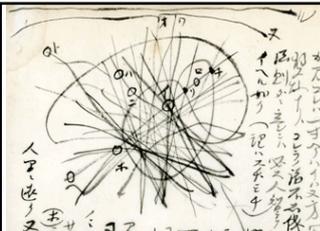
We spray our elms and the following springs are silent of robin song, not because we sprayed the robins directly but because the poison traveled, step by step, through the now familiar elm leaf-earthworm-robin cycle. They reflect the **web of life** — or death — that scientists know as **ecology**.”
(Carson 1962: 189)

南方熊楠(みなかたくまぐす)



「殖産用に栽培せる森林と異り、千百年來斧斤(ふきん)を入れざりし神林は、諸草木相互の關係はなほだ密接錯雜致し、近ごろはエコロギ—と申し、この相互の關係を研究する特種専門の學問さえ出で來たりおることに御座候。」
(南方1971:526)

南方曼荼羅



要素還元主義的な因果律を超え、生きた自然の複雑な關係性を捉えるモデル:「今日の科学、因果は分かるが(もしくは分かるべき見込みあるが)縁が分からぬ。この縁を研究するがわれわれの任なり。しかし、縁は因果と因果の錯雜して生ずるものなれば、諸因果總体の一層上の因果を求むるがわれわれの任なり。」(南方1991:341)

空海が受け継いだ曼荼羅



金剛界曼荼羅



胎蔵曼荼羅

阿字本不生(あじほんぶしょう)

- それ阿字とは一切諸法本不生の義なり。
- =そもそも、阿字とはあらゆるものは本来生じないという意味である。
- 宇宙の神羅万象は、根源的な自発性である大日如来が形となったものである。
- サンスクリット語のア(阿・𑖀)も同様に、原初の声字である。
- 根源・原初の自発性と、それが形となったあらゆる物事は一体であり、生じること滅することもない。

空海『即身成仏義』

- 重々帝網 名即身
- 重々の帝網たるを 即身と名づく
- 帝釈天(インドラ神)の住まう宮殿には網が張り巡らされている。その〈網の目〉には宝珠が付けられていて、無数の宝珠は互いに互いを映し合っ限りが無い。そのように個々の存在者は互いにつながり合い、その身に、宇宙の全てを照らし出している。

空海の現代性

- いのちの根源的な自発性と多様性と関係性を捉えるモデルとして、空海が受け継ぎ、発展させた密教には現代的な意義があるようです。
- それは狭い意味での「宗教」というよりは、生きている世界、いのちの網の目を如実に捉えて、描き出した、古くて新しい理論であるように思います。

おわりに

- 今日は、生きているということに立ち還り、そのあり様を(いのちの網の目)として考えてみました。
- 将来世代(私たちの子孫)に、いのち豊かで平和な地球を末永く引き継いで行くためにどうすればいいでしょう？
- 近代において分断された自然と人類は、「生きている」ということにおいてつながっています。
- 人間もまた(いのちの網の目)の中で生かされています。
- 自然と人間とをつなぎ直し、これからの暮らし方、社会のあり方を構想し直すための場所は、そこなのではないでしょうか。

ご清聴ありがとうございました

文献 1

阿部珠理2014『聖なる木の下へ』角川書店
 宇梶静江2020『大地よ!』藤原書店
 奥地圭子2005『不登校という生き方』NHK出版
 カーソン, レイチェル1974『沈黙の春』新潮社
 木村秋則2009『リンゴが教えてくれたこと』日本経済新聞社
 木村敏1988『あいだ』弘文堂(2005ちくま学芸文庫)
 空海2004a『秘蔵宝鑑』(空海コレクション1)筑摩書房
 空海2004b『即身成仏義』(空海コレクション2)筑摩書房
 コリン, アランナ2020『あなたの体は9割が細菌—微生物の生態系が崩れはじめた』河出書房新社
 竹内信夫2014『空海思想』筑摩書房
 田中克2008『森里海連環学への道』旬報社

文献 2

デ・ラ・カデナ, マリソール2017「アンデス先住民のコスモポリティックス」『現代思想 3月臨時増刊号 人類学の時代』: pp.46-80
 野口晴哉1977a『治療の書』全生社
 野口晴哉1977b『整体法の基礎』全生社
 保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』岩波書店
 星野道夫1998『イニユニック[生命]』新潮社
 南方熊楠1971「川村竹治宛書簡(明治44年11月19日)」『南方熊楠全集 第7巻』平凡社:526
 南方熊楠1991『南方マンドラ』河出書房新社
 南研子2006『アマゾン、森の精霊からの声』ほんの木
 モントゴメリー, デイビッド・ビクレー, アン2016『土と内臓 微生物がつくる世界』築地書館